
最弱悪魔と少年と

将軍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱悪魔と少年と

【Nコード】

N7008M

【作者名】

將軍

【あらすじ】

悪霊に襲われた少年を助けた、不思議な少年、かれは自分のことを『悪魔』だと名乗った。

プロローグ

その少年は、探していた。

5000年（ずつと昔）以上前から、ひたすら1つのものを。

自分にとって必要不可欠な存在を。

「坊や、こんなところで何してるんだい。もう今は深夜だよ。1人で外に出歩いちゃいけないんだよ？」警官の言葉は煩わしいが怪しまれるわけにもいかない「わかった。家はすぐそこだからすぐに帰るよ。」そう言っただけ少年は走り出す。

警官は微笑みながら、その後ろ姿を見送る。

と、警官の顔が突然ひきつった「消えた？・・・」確かに、今の今まで目の目を走っていた少年の姿がかき消すように消えていた。

「どういうことだ、まさか幽霊か？・・・やべえもん見ちまったぞ・・・」

警官は肩をぶるつと震わせて交番に戻る。

彼は知らない、今自分が視たものが『幽霊』どころじゃないってことを

とある悪魔 とある悪魔

「はあ！」男が全力で横に飛び跳ねる。

次の瞬間、先ほどまで男がいた場所に猛烈な勢いで火炎が直撃する。

「まったく、おつかねえもんだ。これじゃあご主人様のところに戻れないじゃねえか。」

「しかし、序列第34位の俺にわざわざ序列7位がお出ましとは仰天だぜ。」

男は上を見上げる「ささつと現れる『アモン』。あんたらしくないぜ。」

男が見上げる先、男がいる廃工場の煙突のてっぺんから、巨大なフクロウが舞い降りてくる。フクロウは地につけたとたん金髪碧眼の男の姿に変わった。

「ほー、またえらく格好いいすがたになったもんだね。」笑いを含んだ男の言葉にアモンは少し眉をひそめた「話をそらすな。私が来たわけ、貴様は十分承知しているはずだ。」

男は微妙に唇をゆがめる「ああ、わかってるさ。元72将である俺をとらえに来たんだろう？」男の言葉にアモンは頷く「貴様が、我々の中でも上位な存在なのはわかっていいる。その実力も十分承知している。だが貴様では私には勝てんぞ。」アモンの言葉に男は微笑を浮かべる「その、おごりが・・・敗北につながるんだよ!!」

突如、男の両手から稲妻が飛び出した！

稲妻は、真つすぐにアモンに向かっていく「俺の能力が全く進歩してないとも思ってたのか！」男の叫び声がこだます「このフルフ

ル様が！そんな簡単につかまったりはしねえんだよ！」ゴガン！
という猛烈な音があたりに響き渡る。

「ここまで音が広がれば、いやでも近くの人間が目覚めます。そうすれば、あいつも……」だが、フルフルの策略は無残にも崩れ去る。

「人が、こない？……騒ぎも起きない……」フルフルの頭の中を疑問が駆け巡る

「まったく……」自分の真上から聞こえた声にフルフルはぎょっとして上を見上げた。
アモンはそこにいた。

「化け物と化け物の戦いを人に感づかれるわけにはいかんだろ。当然結界を張ってある。中の騒ぎを外の人間たちが知ることはない。浅はかな計略だったな。」フルフルは何も答えられない。

「全くこんなことは、初歩の初歩、常識の常識だというのに。この5000年間で頭が鈍ったか『軍団長』フルフル。」

「なぜだ、なぜ貴様が我々を捕らえようとする。貴様も我々と同じはずだ。本来なら貴様も狩られるはずだ。なのになぜ、リーダーたちに協力する？たとえ協力しても少し生きながらえるだけだ、けっきよく無に帰されるんだぞ！」フルフルの絶叫にアモンは苦笑を浮かべた「どこまで低知能なのだ貴様は。考えてみる序列7位の私が5000年前に取引してから今に至るまで、貴様たちを狩り続けているわけを。」

「まさか……俺たちをわざとゆつくり捕らえていると言いたいのか！」それに気付いたフルフルの顔が怒りで染まる。

「貴様の命を伸ばすために俺は存在しているんじゃない！」フルフ

ルの両手に巨大な斧が現れる。

「俺は貴様の道具になどされん！」フルフルが両手に持つ斧がまぶしく輝き始める

「くらえ！雷鳴の裁きを！」叫びと同時に雷光でまぶしき輝く巨大な斧が上空に放たれる。

「ふん。言っただけだ。序列24位の貴様では、7位の私には勝てない。」

斧が到達する直前、アモンは背中から鞘から大剣を抜いた。

「煉獄の業火よ！わが力となれ！」アモンの叫びと共に刀の刀身が渦巻く火炎に包まれる。

「貴様が私にあくまでも従わないというならば・・・この場で私自身の手で消し去ってやろう！」アモンが水平に構えた剣を真上に上げる。

「今から技を出さんじゃ遅すぎるぜ。手遅れさ！」フルフルが笑う
「はたしてそうか？」

アモンの言葉にフルフルは一瞬訝しげな表情をした。だが次の瞬間その顔は今日が具の表情に変わった。

「馬鹿な・・・俺の雷鳴の裁きを防いだだと！」フルフルの放った斧は確かにアモンに

向かっていった。だが刺さっていなかったのだ。

「正直ここまで進歩しているとは思っていなかった。素直に感心した。」アモンはフルフルをまっすぐ見つめた「だが、まだ私には勝てん！」自分の前で強引に停止させた斧をアモンは強引に押し戻す。跳ね飛ばされた斧は力を失いただの斧となって地に突き刺さる。

「おや・・・」アモンは地に突き刺さった2本の斧を見てにやりと笑った。

「まるで、十字架のようだ。まさにここは今この瞬間貴様の死に場所として最適な場所となったわけだ。」「くそが、くそが、くそが！！」フルフルが次々と放つ稲妻をアモンは軽々とはじき返しながら降下していく。

「なぜだ、なぜなんだ、あれから俺も変わったのに、変わったはずだったのに、なんでなんも変わってないんだ！」フルフルの叫びがこだます「それは間違いだ。貴様は変わった。確かに成長した。」アモンはフルフルの前に立つ「貴様はさっき私に言った『俺が全く進歩していないと思ったのか』と。」アモンの持つ刀を包む火炎、地獄の業火が勢いを増し燃え盛る「その言葉、そっくり返そう。」アモンが剣を振りおろしフルフルは業火にのまれた。

数分後、アモンは同じ場所に佇んでいた。

「これで、やっと72人中の半分になるのか。まあ、わざと遅くしてるんだから仕方ないか。」アモンはふと空を見上げる、誰かに見られていたような気がするのだ、いや気のせいではないのだろう、おそらく天界で『あの人』がこちらを見つめているに違いない。

「さあて、じゃあ、今世紀中に狩ると決めた残りの奴らを片付けるとするか。」

立ち去るうとしてアモンはふと、今までフルフルがいた場所を見据

えた「悪いな、本来はこの場所で貴様を消すつもりではなかった。
タイミング悪かったよな、貴様がマスターといっしょにいれば、私
が自らの手で消すことはなかったのに。」

アモンは、手を振った「さらばだ、元同志。」
そして2度と振り返らなかった。

とある少年 と ある少女

「ふあああ・・・マジで眠い。やっぱなれない徹夜勉強なんてするんじゃなかったよな。」

朝7時、駅のホームで電車を待つ少年は大きなあくびをしていた。

彼の名は、奉 信仁。16歳の高校2年。そして、今人生最大のピンチを迎えていた。

「まじで、あんな誘いのらなきやよかった・・・」じつは信仁はあるかけをしていたのだ、

その賭けとは『次のテストでこの中で成績がぶりだったやつが、罰ゲームを受ける。』というやつだった。

「その罰ゲームが、金とかならまだよかったけどさ・・・。」深いため息が漏れる「なんで、一人かくれんぼなんだよ！マジで俺殺す気かつつーの！」信仁はうなだれる。一人かくれんぼとは、いま巷で流行っている、昔で言うこっくりさんのようなもので、いわば都市伝説の一つである。人形の腹を裂き、中に米を詰めお風呂場に置き、その人形とかくれんぼをするという内容からして、信仁としては絶対関わりたくない系統の話なのだが、それを今回やらなくてはならないのだ。

「ちょっと、信仁。何さつきから顔失せて頭抱えてんのよ！」「ごっ！と後ろから押されて信仁は危うく転びそうになった「なんだ、美紀か・・・」「あんた、さつきから呼びかけても反応なしだし。一体何をそんなに悩んでんのよ。」「じつは、こういうことがあつてかくしかじか・・・。」

「あんたね・・・そんなの断つちゃえばいいんじゃない。」「僕と

しては、たとえ悪意があっても一度した約束は絶対に守りたいんだよね。」「そんなこと言ってたて、信仁はやりたくないでしょう？別に約束破りを理由にあいつらが暴力振るっても、あんたならどうとでも……」

美紀の言葉は最後まで続かなかった「いやなんだよ。そういうのは強き者が力で弱き者を虐げるのは。美紀2度とそんな事を言うな！」「ごめん……」信仁は昔からこうなのだ、普段は温厚なタイプなのに突然、性格が180度変わったかのように豹変する。『まあ、仕方ないか……』昔からこうだから、いまさら気にすることでもない、今はどうやってこの問題を解決するのが先だと美紀は強引に思考を切り替える。

「でも、実際問題信仁はいやなんでしょう？ていうか怖いのなら私と一緒にやってあげようか？」美紀の言葉にブッ！と信仁は吹き出した。「いあいやいやいやいや、いくらなんでも年頃の女の子と男の子が2人つきりで家にいるのは……！」「しまったという顔をする信仁を見て美紀は怪訝そうな表情を作る

「なんで、2人つきりになるって言うのよ。あんたいやらしい想像してるの？」「いやあの、そういうわけじゃなくて、リアルな方！今母さんいねんだよ。父さんはずっと向こうだし……」ちよつと引き気味になった美紀に信仁はあわてて弁明する。

「そう言えば、信仁のお父さんはイスラエル政府の役人だったわね……でも信仁の母さんは普通の先生でしょう？」「先生は先生でも、大学教授だから。特権使って、研究名目で父さんに会いにいつてんだよ……」「全く薄情な母親ね……」正直呆れた美紀だったが、だったら余計放っておけない。

「だったら、あんたあたしには来てほしくないわけ。ふーん、まあ

それなら、それで良いけど？お化け屋敷にすら1人では入れないくらい臆病なくせして。」うつと詰まる信仁、確かにお化けとか化心靈関係は大嫌いだ「かといつてな。だいたい美紀は部活どうなんだよ？明日から夏休みだぞ。大会とか・・・」

「あいにく、今年は比較的練習とか少ないの。顧問が引退して新しい奴に変わったから。」その先生絶対に生徒に甘いだろうと思ったの信仁だったが、今は関係ないことと割り切る。

「まあ、そんならお願いしようかな。でもさ、なんでそんなに俺の世話を焼きたがるわけ？」ブっ！と

先ほどの信仁以上の勢いで美紀が吹き出した「べ、べつに！あんたの世話やりたがってんじゃないわよ！あんたがあまりにも情けなicaらつい手伝おうと思っただけで・・・」何やら顔を真っ赤にして顔の前で両手をぶんぶん振る美紀に不思議そうな眼を向けた信仁だったが、そんなに深くは考えない。

「おっと、電車が来た。」赤い車体の電車がホームに滑り込んでくる「そんじゃ、僕はあっちの車両に行くよ。」「なんでよ？」「さすがに、恋人じゃあるまいし一緒に同じ車両の隣同士になる必要はないと思うんだけど？」また一瞬でまかになった美紀を放って信仁は3号車に乗りこむ。ピー！という笛の音と同時に列車が動き出す。その電車が通過した鉄橋に『少年』はいた。

『この町にいるはずだ、ぜつたいに。私が探し求めていた存在が。』鉄橋を人が歩いて行く、だがだれも

鉄橋にぶら下がっている少年の存在に気付かない。「さて！ささと私のマスターを見つけ出しますか。」少年は鉄橋から飛び降り姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7008m/>

最弱悪魔と少年と

2010年11月27日10時45分発行